最優秀賞

障害のある人もない人も皆が活き活きと働ける職場づくりを目指して

有限会社 化成フロンティアサービス

化成フロンティアサービスは、三菱化学黒崎事業所内の広大な敷地の中に所在する。

◆企業プロフィール

有限会社化成フロンティアサービス
代表者：代表取締役社長　大平教義
〒806-0004　北九州市八幡西区黒崎城石1-1
TEL093-643-4390
FAX093-643-4393

●業種および主な事業内容

サービス業
ＯＡセンター、メール・写真センター、パーソネルサービスセンター、アグリカルチャープロジェクト（例：自然農法による野菜づくり）ほか

●従業員数

109名（平成17年3月現在）うち障害者数64名
＜内訳＞
視覚障害者3名（うち重度3名、重複1名）、聴覚障害者9名（うち重度5名、重複2名）、肢体不自由者39名（うち重度30名、重複1名）、内部障害者8名（うち重度5名）、知的障害者4名（うち重度2名）、精神障害者1名

●事業所の概要と障害者雇用の経緯

平成5年3月、障害者の雇用促進を図り、企業の社会的責任を果たすために、三菱化学株式会社（当時はその前身・三菱化成）の特例子会社として現在地に設立、同年12月の事業開始時の従業員数29名のうち障害者は18名（うち重度13名）であった。

視覚障害者については、視覚障害者のための専門学科をもつ筑波技術短期大学より企業実習を受け入れ後、平成11年と14年に全盲の卒業生を各1名採用し、現在3名の視覚障害者を雇用している（うち1名は重複障害で、視覚障害については視野狭窄および弱視で一般業務上の支障は特にない）。

三菱化成発祥の地に誕生した ノーマライゼーションを目指す障害者のための特例子会社

▼三菱化学グループがバックアップするオフィスサービス業

有限会社化成フロンティアサービスがある三菱化学黒崎事業所は、三菱化学の前身である三菱化成の発祥の地。東西2キロ、南北1キロ、約60万坪の敷地内には関連会社を含めて約3,000名の従業員が三菱化学を中心にさまざまな業務を行っている。

三菱化学にとって歴史と伝統のあるこの地は、同時に人脈も仕事も豊富な場所でもある。黒崎事業所に「障害者の雇用促進を図り、企業の社会的責任を果たす」ために、三菱化学の特例子会社として化成フロンティアサービスが誕生した理由は、三菱化学グループとしてバックアップしやすい条件が揃っていたからである。社名に化成が付くのもそのためだ。

ここには、情報社会を支えるCD基板の材料、プリンターのインクから自動車用タイヤのカーボンブラックなど、多種多様な化学製品を製造している三菱化学をキーステーションに、工場のメンテナンスを行う企業、その原材料や製品の搬出入を行う企業、IT関連企業など、さながら化学工業のデパートのような企業集団が形成されている。

三菱化成（後の三菱化学）が100%出資の有限会社特例子会社として、平成5年3月に、障害者雇用促進のために設立した同社は、これらの事業所のオフィスサービスを中心に各種のビジネスサービスを受託する企業としてスタートすることになった。

▼すべての従業員にとって働きやすい職場環境をつくる

前述したように、事業を開始した平成5年当時には従業員29名のうち障害者が18名であったが、現在は109名の従業員のうち障害者は64名（うち重度障害者数45名）を占める。

そのうち、視覚障害者は3名、聴覚障害者は9名、肢体不自由者が最も多く39名である。また、内部障害者はペースメーカーを使用する心臓疾患者や人工透析を行っている者などが8名いる。そのほか知的障害者4名と精神障害者（てんかん）が1名いる。

このように、多数の障害者を雇用している同社では、安全・健康と仕事を両輪として掲げ、特に障害者の安全と健康に配慮した企業経営を続けている。

障害者が6割を占める企業のため、8時半～17時15分の勤務時間中にケガをしたりしないように、何よりも安全面と健康面に配慮している。その結果、平成15年11月に無災害90万時間で表彰されたほど。現在も無災害記録を更新し続けている。

▼ソフト面でもバリアフリー化が図れるように工夫

安全面で配慮するといっても、基本的な考え方は、さまざまな障害者および健常者を含むすべての従業員にとって働きやすい職場となる「ノーマライゼーション」を目指すことである。したがって、職場改善についても、特に視覚障害者を意識したものではなく、皆が普通に働きやすくするという観点から取り組んでいる。

ソフト面では、挨拶・声かけをすることを基本に、お互いの体調管理をしながら明るい職場づくりを目指していくことに重点を置いており、聴覚障害者を講師として手話の勉強会を各職場で続けている。また、職業コンサルタントや生活相談員を配置し、仕事や生活面で必要に応じたサポートを行うようにしている。このような対策や活動を通じて、すべての従業員が相互理解を深め、ソフト面でのバリアフリー化が図れるように努めている。

化成フロンティアサービスでは、さまざまな障害者が働いている。通路幅はゆったりした職場レイアウトになっている。

▼ハード面での職場改善は さまざまな障害を考慮して

ハード面では、安全対策でのバリアフリーが主体となる。しかし、場合によっては難しい問題もある。

例えば、視覚障害者のための点字ブロックは車椅子利用者にとっては、突起物として段差障害になる。逆に、車椅子利用者のための歩道と車道のバリアフリーは、視覚障害者にとっては歩道と車道の区別がなくなり、かえって危険になる。

このように障害の種類によって一方のメリットが他方のデメリットになることもあり、ケース・バイ・ケースで全体的に有効となるような対応が重要になってくる。

同社では、常にそのような観点からさまざまな障害者のことを考慮しながら、1.5m幅の通路を確保、要所はすべり止めの材質を使用、扉は基本的に自動扉、休憩室には簡易ベッドの設置など、ハード面での職場改善についてもきめ細かく取り組んでいる。

さらに現在、視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者各1名の計3名が住む三菱化学の単身赴任者寮（一般従業員30〜40名と同居）では、警備会社と契約、万一の場合の安全対策を講じている。

▼頼れる「ビジネス・コンビニ」に

組織的には、まず一番大きいOAセンターではデータ入力・出力処理、印刷用版下作成、名刺・はがきなど印刷物全般、書籍類出版、ホームページ制作、CAD、プログラミング、ビデオ制作、事務代行など、OAから編集・印刷関連の総合窓口となっている。

メール・写真センターは、メール部門と写真部門から構成され、それぞれ次のような業務を行っている。メール部門は、三菱化学グループ黒崎事業所内約110ヵ所の集配と、東京、大阪、北海道など各場所間の集配業務を行う社内集配便、社内報などの袋詰め・仕分け・発送業務、宅配便受付、切手・はがきなどの販売業務、切手管理・切手貼り代行業務、およびパスポート申請書の作成などを行っている。写真部門は、各種写真撮影、入門証作成、デジタルカメラ対応のDPE受付、フィルム、インスタントカメラの販売などを行っている。

パーソネルサービスセンターは、給与・年金・健康保険など人事関連事務や健康診断の業務を行っている。この部門はもともと三菱化学の人事関係のメンバーが仕事と一緒に移籍したもので、現在はすべて健常者が業務を行っているが、将来的には障害者を配属したいと考えている。

アグリカルチャープロジェクトは、自然農法での野菜づくりや木炭づくり、椎茸栽培、洋ラン栽培などを実験的に行っている。健常者2名、肢体不自由者1名、知的障害者2名のまだ小さな組織である。

このほか、三菱化学四日市事業所内に4名が所属する四日市営業所が活動しており、これらが総力を挙げて、「頼れるビジネス・コンビニ」をスローガンに、業務を遂行している。現在、年間売上高約7億円でグループ内の仕事が大半だが、営業努力により約4%ほどグループ外からの受注となっており、わずかながらも利益を計上し、健闘を続けている。

OAセンターのオフィス。視覚障害者2名、中村忠能さんと中村真規さんの席は入口左側に設けてある。

改善のポイント 1

OAセンターの職場改善で2名の視覚障害者の自立を支援

◆最優秀賞

▼専門知識を活かしてパソコンを扱う業務に専念

化成フロンティアサービスに最初に重度（障害1級）の視覚障害者が雇用されたのは平成11年4月のことである。筑波技術短期大学の情報処理学科を卒業した中村忠能さん（障害1級）が入社し、OAセンターに配属された。その後、14年4月に同じく筑波技術短大情報処理学科卒の中村真規さん（障害1級）が入社、やはりOAセンターに配属されるが、同社の視覚障害者への本格的な対応は、この11年4月に始まる。

なお、視野狭窄および弱視の障害者（1名）については、書類（図面）保管庫の管理と同データベースのパソコン入力によるメンテナンス業務を別館で行っているが、作業上の支障がないため、特に対策は取っていない。

現在、中村忠能さん、中村真規さん2人が日常的に行っている業務を整理すると次のようになる。

①テープライター：録音された会議や講演会などの内容を聞き、パソコンでワープロ文書として入力する（テープ起こしをする）。

②インターネットホームページの作成：他社からの依頼を受け、ホームページに視覚障害者がアクセスできるように作成・改善する。自社のホームページの作成から着手中。

③各種点字資料の作成：点字名刺、点字図書、点字議事録など。

④インターネットを検索しての各種情報収集業務。

点字プリンター。点字印字の際、かなり穿孔音がうるさいため、点字プリンターは厳重な防音箱の中に設置され、印刷中も蓋が閉まっている。

点字名刺印刷機で名刺に点字を入れる。

画面読み上げソフトを使ってデータ入力中の中村真規さん（手前）と中村忠能さん（左奥）。

2人がこれらの作業をするに至るまでに、同社では以下のようなきめ細かな対応策を講じている。

▼事務所の配置・動線、設備機器など視覚障害者用に職場環境を整える

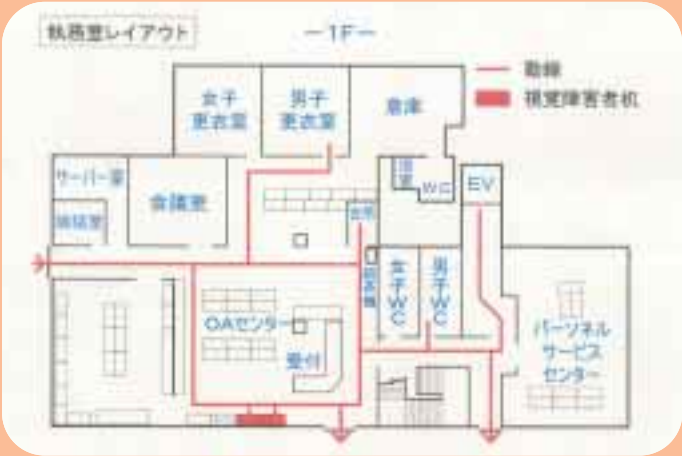
下の図の「執務室レイアウト」にあるように、2人が日常的に作業するOAセンターの事務所は、入口近くに席を設けるとともに、隣りにチームリーダーを、すぐ後ろの受付の近くに職業コンサルタントを配置している。

また、トイレ、更衣室、手洗い、給茶機（台所の前）、エレベーターなどへの移動がなるべく直線的になるように、他の机の配置や設備の配置を考慮した。通路幅は、前に述べたように車椅子使用者への配慮からも1.5m幅を確保し、当然のことながら通路上に障害物を置いていない。

設備機器については、まずパソコンの環境を、視覚障害者向けに設定したことが挙げられる。パソコン本体は通常のものを使用しており、特殊ではないが、PCトーカーやXPリーダーなどの画面読み上げソフトを搭載するとともに、高性能ヘッドホンを装備している（導入費用は約15万円）。また、作業のための専用設備として、パソコンから点字印字を行う点字プリンターを設置し、点字名刺作成のために点字名刺印刷機を設置した（導入費用は2つで約100万円）。

その他、行動予定表やトイレ、エレベーター、給茶機、会議室などの要所要所に適宜点字表示を行っている。

行動予定表の点字表示



OAセンターレイアウト

給茶機の点字表示

エレベーターの点字表示

改善のポイント2

通勤・住居対策、コミュニケーション対策など

◆最優秀賞

▼全額公費で2ヵ所の交差点に音声対応装置と点字ブロックを設置

中村忠能さんは、前述した三菱化学の単身赴任者寮に住んでいるが、防災対策として警備会社に依頼して、室内の火災警報センサーと非常連絡設備、首にかけて携帯できる押しボタン式非常通報装置を会社負担で設置している（設備のリース料込みで月額10,000円）。また、建物の入口部分にある階段に手すりを取り付けた。

また、中村真規さんはバスとJRを乗り継いで片道約1時間半かけて通勤しており、全従業員の中でも最も遠距離の通勤者である。通勤時間帯がラッシュ時のため、安全・健康への配慮から混雑しない車両への乗車が可能な特急列車での通勤定期券を通勤手当として支給している（通勤定期の増加分月額15,000円）。

通勤途中に信号機のある交差点を横断するため、2人が横断する黒崎駅北口近くの交差点と中村忠能さんが横断する単身赴任者寮近くの交差点の2ヵ所に、音声対応装置と点字ブロックを設置することを所轄警察署に陳情。全額公費負担での設置が実現した。

首にかけているのは押しボタン式の非常通報装置。このボタンを押すと、警備会社へ通報され、異常連絡をすることができる。

所轄警察署に陳情し、通勤途中の信号機のある交差点に、音声対応装置と点字ブロックを設置してもらった。

社宅はアパートの1階部分にあるが、玄関入口まで階段があるため、手すりを設置した。

▼従業員全員とのコミュニケーションを重視したソフト面での配慮

挨拶・声かけは、障害者全員への配慮として実行しているが、特に視覚障害者に対しては会話の前に必ず名前を名乗るように心がけている。

また、職業コンサルタントと障害者職業生活相談員は、障害者の仕事や生活面でのサポートを必要に応じて行っているが、特に、視覚障害者については入社直後は通勤に不安があったため、寮や駅からの送迎を行っていた。現在は単独での徒歩通勤が可能になったが、大雨や積雪時などには必要に応じて車（タクシーなど）の利用を認めている。さらに、本人が希望すれば、通院や買い物などに職業コンサルタントが同行するようにしている。

メールを使ったコミュニケーションが画面読み上げソフト付きのパソコンで可能なため、聴覚障害者を含む社員全員とのコミュニケーションが円滑になった。同社では、今後ともこのような意思疎通を積極的に図っていくように心がけていくことにしている。

そのほか、健常者では分かりにくい、障害者の心のバリアをどうしたら排除できるかをテーマに、チームリーダー以上の従業員25名が月2回勉強会を開催（1～2時間）し、カウンセリングに関する本などを教材にして話し合いを行っている。さらに、年2～3回ほど講師を招いた勉強会も行っている。

このように、ハード面、ソフト面でさまざまな手厚い配慮をしているが、同社の基本的な考え方は、視覚障害者もそのほかの障害者もそれ以上の特別扱いはせず、「自分のできることは自分でやる」という、あくまで自立を前提に対応することにしていることだ。そして、健常者を含めてすべての従業員が支え合って健康で働きやすい環境＝ノーマライゼーションを実現することを目指している。

◆改善・取り組みの実例

問題点・課題	改善策と効果
ハード面での職場改善については、障害の種類によって、一方のメリットが他方のデメリットになることもあった。	すべての障害種類、特に車椅子使用者と視覚障害者の職場内での通行の安全を確保するため、1.5m幅の通路の確保、要所へのすべり止めの材質の使用および自動扉の設置を行った。
視覚障害者にとって、事務所内の配置の理解にオリエンテーションが必要であった。	職業コンサルタントやチームリーダーのサポートにより、現在では事務所の構造・配置を熟知。社内では歩行杖を使用していない。通常は他の従業員が2人を視覚障害者と意識しないほど。
視覚障害者のためにパソコン操作の環境設定が必要となった。	画面読み上げソフト、高性能ヘッドホンおよび点字プリンターを設置することにより、視覚障害者のためのパソコン操作の環境を整えた。
視覚障害者と他の従業員との日常的なコミュニケーションがうまくいかない。	日常的な声かけのほか、視覚障害者には話しかける前に必ず名前を名乗るようにした。また、業務上の連絡は頻繁に視覚障害者に話しかけるだけでなく、画面読み上げソフトの導入により、メールを通じて相互に情報交換できるようになった。
社内回覧文書や給与明細など個人情報もチームリーダーや障害者職業生活相談員が代読していた。	これらの個人情報をデータ化し、パソコンの画面読み上げソフトと高性能ヘッドホンを使うことで、他人に知られたくない情報を含めて自分で入手できるようになった。
視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者が住む単身赴任者寮での安全対策が必要であった。	警備会社と契約することで、万一の場合に備え、安全対策を講じている。
視覚障害者のうち1名については、通勤時間帯がラッシュ時になり、かつ遠距離通勤のため、安全・健康面への配慮が必要となった。	特急列車の通勤定期券を認めたことにより、乗車の機会が増え、また、混雑しない車両への乗車が可能となった。これにより、安全・健康面の問題はほとんどなくなった。
視覚障害者の通勤途中にある交差点の通行の安全が確保されていない。	所轄警察署に陳情し、通勤途中の信号機のある交差点に、音声対応装置と点字ブロックを設置してもらうことにより、交差点の通行の安全が確保された。
視覚障害者の職務遂行の能力の向上に伴い、視覚障害者ならではの職務の創出が課題となった。	ホームページのアクセシビリティについて、自ら悩み解決してきた課題が、教育用テキストの制作依頼となって実り、さらに他社のホームページの検証・アドバイスや制作などにつながり、新しい分野が拓けつつある。

有限会社 化成フロンティアサービス

◆最優秀賞

障害者ならではの仕事ができて満足しています

ＯＡセンターの中村忠能さん
（27歳）

●高校時代からパソコンに興味を持つ

生まれつき視力が弱く、全盲に近かったため、高校まで佐賀の盲学校に通学していました。普通はそこから鍼灸の資格を取るのですが、パソコンが好きだったので、あえて筑波技術短期大学の情報処理学科に進みました。まだWindowsの時代ではありませんでしたが、基礎的なプログラミングを勉強しました。

卒業のころはもうWindowsの時代になっており、プログラミングや情報関係で全盲の障害者が就職するのはなかなか厳しかったですね。結局、短大の先生の紹介で化成フロンティアに就職できたときは本当にうれしかったです。

就職したときの気持ちとしては、できれば障害者の特性を活かした仕事をしたいと思っていました。入社当時は会社も私もどのような仕事ができるのか模索中で、スキャナーで読み込んで入力するような仕事をしていた程度です。後は点字印刷関係、会社案内の点字版などをつくりました。

●今後も意義のある仕事を続けていきたい

しばらくして、ホームページの制作に興味をもち、アクセシビリティの問題についても個人的に勉強するようになりました。そして、会社のホームページについて視覚障害者の立場からどうしたらアクセスしやすいか、意見を言うようになりました。また、月1回日曜日に開かれるパソコン・ボランティアという障害者のためのパソコン相談会に相談員として参加していましたが、その縁で、ある学校法人からの依頼でホームページ制作者を対象とした150ページを超える教育用テキストを制作することになり、もう完成間近です。大変意義のある仕事をしていて毎日が充実しています。

今後、公共関係、特に福祉関係の団体などから高齢者や障害者のアクセスしやすいホームページづくりの依頼があることを期待しています。また、パソコン・ボランティアでやっているような、障害者や高齢者を対象にした上手なパソコンの使い方などの教室やテキスト制作など、教育に関わる仕事をやってみたいとも思っています。

普通の仕事をしていては、どうしても目の見える人にかないませんので、障害者だからこそできる、このような仕事をぜひやっていきたいと考えています。

使いやすいホームページの企画・制作を提案する仕事に挑戦したい

ＯＡセンターの中村真規さん
（24歳）

高校時代から急速に視力が衰退したため、筑波技術短期大学情報処理学科に進み、障害者としての技術を活かしたいと考えるようになりました。

入社したのは中村忠能さんより3年後で、同じOAセンターに所属し、現在は一緒にホームページ制作者向けの教育用テキストを制作しています。完成後は、あらゆるホームページ制作者にとって使いやすいテキストとして活かされ、その結果、多くの障害者や高齢者がアクセスしやすいホームページが普及するようになれば、本当にうれしいですね。

そのほかには、点字名刺印刷や会社案内パンフレットの仕事などを行っています。

今後は、教育用テキスト制作の実績を活かして、よりウェブアクセシビリティのニーズが高い個人向けや鍼灸院・交通事業者向けに、誰もが利用しやすいホームページの企画・制作を提案するような仕事をしたいと考えています。

また、ホームページの制作（正しいHTMLやCSSの活用によるホームページづくりなど）やコンピュータ操作の基礎、点字などのテーマを中心に、大人数向けの講義、少人数指導、個人指導などを行う教育・研修の分野の仕事をしたいと強く希望しています。できれば数ヵ月間、講師の卵として講習会に参加するなどの準備をしたいと考えています。

さらに、もともとの専門である交通学（交通バリアフリー）の分野に仕事の範囲を広げられないかとの夢も持っています。

◆今後の課題＆挑戦

視覚障害者ならではのウェブアクセシビリティの仕事を積極的に開拓する

▼専門知識を活かして パソコンを扱う業務に専念

パソコンをはじめIT関連の技術の普及は、障害者にとって努力次第で雇用の機会が拡大するという効用をもたらしている。車椅子の障害者でも聴覚障害者でも健常者とほとんど変わりなく作業することができるし、難関であった視覚障害者にとっても画面読み上げソフトなどの活用で健常者に劣らない仕事の遂行が可能となりつつある。

したがって、今後障害者雇用を拡大していくうえで、パソコン関連の仕事をより積極的に拡大していくことが必要と考えている。実際、三菱化学が社内で行っている、あるいは外部に発注しているパソコン関連の作業がまだまだあるはず。当面、これらを重点に同社で受注するよう積極的に働きかけていく。パソコン関連機器の購入費やLANの維持費にしてもそれほど大きなものでなく、十分採算が合うと同社では考えている。

特に、これまで必ずしもうまくいっていなかった視覚障害者と聴覚障害者のコミュニケーションが、画面読み上げソフトの導入により改善されてきた。今後は、テープ起こしで視覚障害者がテープを聞き入力した原稿を聴覚障害者がチェックし、編集して仕上げるという両者のチームワークが実現することを期待している。

▼ウェブアクセシビリティの分野に 新たな可能性を求めて

ウェブアクセシビリティとは、障害の有無や種類、性別、年齢さらには閲覧環境に関係なくどのような人でも支障なく閲覧し、活用できることを意味する。昨年、このウェブアクセシビリティについて、ホームページのバリアフリーのJIS規格ができて、ようやくこのような考え方がインターネットの世界でも普及しつつある。だが、ウェブサイトの現状は障害者や高齢者にまだまだ敷居が高く、とても閲覧しやすいとは言い難い。

同社では、先述したように、中村忠能さん、中村真規さんの2人を中心に、まず自社のホームページを視覚障害者がアクセスできるように改善中である。さらに、中村忠能さんは仕事以外の場面で、ボランティアとして外部のホームページのアクセシビリティを手がけてきた。

そのような縁からようやく仕事として、ウェブデザイナー（サイト制作者）対象のウェブアクセシビリティに関する講座で使う、教育用テキストの作成を依頼され、現在、完成間近な状況になっている。まさに、中村忠能さんのウェブアクセシビリティに関する経験が評価された結果といえる。

▼視覚障害者の長所を活かした 仕事の開拓

この教育用テキストの完成後、同社では他社のホームページが高齢者や障害者にとって本当に閲覧しやすいかを検証して、よりよいホームページをつくる提案を積極的に行おうとしている。すでに、ある会社からホームページの制作の依頼を受けており、今後ホームページの制作はもとより、アクセシビリティの検証とアドバイスについては、仕事になり得る可能性がある。

また、中途で視覚障害者になった人や高齢で弱視になった人から、パソコンを習いたい、画面読み上げソフトの使い方が分からない、パソコンの操作法を教える所はないのかなどの声がある。これはまだ構想の段階だが、これらを教える教室や教育用テキストの制作なども仕事になり得ると思われる。

視覚障害者を対象としたパソコン操作に関する仕事では、担当者が視覚障害者であることがむしろメリットであり、しかもアクセシビリティに詳しい制作者を擁することは貴重な武器である。今後、同社では熟練の技術を持った視覚障害者を全面的にバックアップすることで、大きく飛躍していくことを目指している。

教育用テキストの資料

ウェブアクセシビリティの作業中の中村忠能さん。ヘッドホンの位置をずらすことにより、業務上の指示にいつでも対応できるようにしている。

有限会社 化成フロンティアサービス

◆最優秀賞

職場責任者が語る

視覚障害者の能力を活かした仕事をやってもらいたい

常務取締役　森川清照さん

●未開拓だった視覚障害者の業務

視覚障害者を職場に迎えるにあたっては、これまで多くの障害者を雇用してきましたので、その経験上からも特別扱いはしないことを基本にしてきました。

ただ、彼らにできないことはカバーするのは当然ですから、職場レイアウトを工夫したり、要所に点字表示をしたり、交差点の音声対応装置の取り付けや、点字ブロックの設置などの手配をしたりしました。

そのうえで視覚障害者にできることは何かを考えました。正直言って、マッサージ師や芸術家など特殊な職業を除いて、視覚障害者の社会での仕事はまだまだ未開拓だと思います。彼ら2人は筑波技術短期大学出身で、パソコンをはじめ情報関係では専門知識も技術もありましたので、まずはパソコンを活用する仕事をしてもらおうと考えました。それに点字印刷関係やテープ起こしなども考えつきました。

パソコンは画面読み上げソフトと高性能ヘッドホンを装備しただけで、彼らは普通の健常者以上に見事に仕事をこなしてくれます。点字印刷も点字プリンターや点字名刺印刷機を設置することでやはり見事に対応してくれました。さらにテープ起こしについてはびっくりしました。視覚障害者の聞き取りの力が優れていることは聞いてはいましたが、2人は健常者の数倍の速さで正確に早送りのテープを聞き取り、データ入力する力を持っているのです。どの視覚障害者も彼らほどの能力があるとは思いませんが、それにしても驚きました。

●勉強家の2人には新たな挑戦をしてもらいたい

今後の会社の発展のためには、三菱化学グループ内からだけでなく、もっとグループ外に仕事を広げていく必要があります。特に点字印刷などは今後増えていきそうにも思えますが、もともとこの分野はボランティアが活躍しており、商売として参入しにくいところなのです。

そんな中で、ホームページのアクセシビリティ関連の仕事は、まさに視覚障害者ならではの能力を活かしたものであり、今後、グループ外からの受注が大きく発展する可能性を秘めたものですので、大いに期待しています。

それにしても、中村君たちは2人とも仕事熱心で真面目なだけでなく、勉強家なのには感心しています。アクセシビリティの作業がボランティアから仕事に発展してきたのも、彼らの人脈があったからであり、日ごろからの問題意識と努力があったからです。その意味では他の従業員にいい刺激を与えてくれたと感謝しています。

お互いに相談し合って、いい仕事をしていきたいですね

仕事面で相談相手のOAセンタープロデューサーの木下雅子さん

2人とも勉強家で積極的なのには感心しています。健常者が気がつかないことを教えられることも多いのです。例えば、社内LANの掲示板に強調の色を付けたり、下線を引いたり、中には絵文字を入れたりする人がいますが、視覚障害者にはそれは通じないんですね。そんなときは必ず注意されます。このようなちょっとしたことがアクセシビリティのような仕事をするときには大切なんですね。

今後も中村さんたちの能力を発揮できる仕事の幅を広げていかなくてはなりません。それには彼らの希望も聞きながらやっていく必要があります。実際、こちらが可能だと思っても本人たちができないということもありますし、逆にこちらが無理だと思っていることでも本人たちはできるということもあるのです。

ですから、相互に十分打ち合わせをして、今後もいい仕事をしていきたいと考えています。

最近ではすっかり自立して、相談を受けることもなくなりました

職業コンサルタントの中村博子さん

会社としては、障害者のみなさんからの相談に一応誰でもいつでも乗れる体制を整えています。しかし、日常はそれぞれ自分の仕事に追われていますので、いつでも気軽に悩みを聞いたり、相談に乗ったり、ちょっとしたお手伝いをするために職業コンサルタントを置いています。

実際、大きなことから小さなことまで、上司に相談する前に、職業コンサルタントを通して相談することで解決した問題は多いのです。

視覚障害者のうち、中村忠能さんは唐津出身のため土地勘がなかったこともあり、入社当時何度か買い物に一緒に行ったこともありました。最近はすっかり自立してそのようなこともなくなりましたね。ちょっとしたことは仲間同士で助け合うようになったからかもしれません。いろいろな意味で自信がついてきたのでしょうね。